上級日本語作文の誤用の文章構造分析の意義

木戸　光子

要　　旨

本研究では、上級日本語学習者の作文の文章分析に基づいて、文章レベルの誤用分析を試みた。日本語学習者の文章の誤用と正用の間にはいくつかの段階がある。また、学習者の作文には２種類の誤用が見られた。（1）正しい使用を予測できる場合、（2）書き手の意図を文脈から判断する必要がある場合、である。（1）は単語、句、節、文、または接続された文の誤用であり、これらの誤用は関連する言語単位を確認することによって修正できる。一方、（2）は段落や文章に関わる誤用であり、文章レベルでの処理が求められる。一見すると正用のような誤用は、(2) 文章レベルの誤用と認められる。文章構造分析によって、このような文章レベルで誤用を引き起こす要因を特定できる。

【キーワード】文章構造　上級日本語　作文　誤用　正用

Significance of Discourse Analysis for Errors in Advanced-level Compositions

KIDO Mitsuko

【Abstract】 In this research, I try to analyze errors based on the discourse analysis results of advanced Japanese learners' compositions. I emphasize that there are several stages between errors of Japanese learners' writings and correct use. There are two types of errors in learners' compositions; (1) the case where it is possible to predict correct use, (2) the case where understanding the writer's intention needs to be judged from the context of the composition. (1) consists of errors of words, phrases, clauses, sentences, or connected sentences, and these errors can be corrected only by looking at the relevant language unit. On the other hand, (2) are errors of paragraphs and sentences, and these require processing at the text level. Errors that look like correct use are misuses on the text level of (2). Discourse analysis is needed to identify the factors that cause errors at the text level.

【Keywords】 Text structure, advanced Japanese, composition, errors, correct use

1．はじめに

近年、日本の大学で学部・大学院において初級から上級まで様々な日本語レベルの留学生が勉学している光景が日常的に見られるようになった。その一方で、書く能力に関しては上級レベルになっても日本語の文章表現力が不十分な学習者もいる。文法のまちがい、不適切な語の選択など誤用の多い意味不明の文章だけではなく、何を言いたいのかよくわからないようなまとまりのない文章、あるいは、語や文法の誤用はないのに意味不明の文章もある。このような語や文法の誤用のように明示的な誤用の他、日本語として何か違和感のある作文に出くわすことがある。これは文章レベルでは誤用なのか正用なのか判断しにくい。

本研究では、以上のような違和感のある作文が出てくる原因を明らかにするにあたり、作文に内在する要因を解明するために、作文の文章構造分析によって文章レベルの誤用分析を試みる。文章論の文章構造分析の方法によって行った上級日本語学習者の作文分析を通して、文章レベルの誤用が起こる要因を検討する。

なお、母語話者の作文の分析は国語教育および日本語教育で行われてきた一方、本研究のように誤用に焦点を当てた文章論の研究は新しい試みである。文章論と誤用分析を関連づけた研究の一環としてはまだ研究途上であり、本稿は研究のきっかけとなる考え方を示したものである。

2．日本語学習者の作文の誤用認定

日本語教育において学習者の誤用については、文法研究や習得研究、最近ではコーパス研究などで取り上げられている。学習者の作文に表れた誤用を網羅し、分類して記述する中で、文脈に関わる誤用を取り上げる研究も出てきている。一方、上級学習者の作文は中級学習者の作文に比べると形態面での誤用は少ないという指摘もある（加藤他2016）。学習者の作文の誤用を網羅し、そのすべてを分類しても、それらの誤用が学習効果という点で修正すべき誤用とは限らない。

例えば、作文の添削において、複数の添削者に正誤の判断の揺れがあり、それが作文評価に影響することもある。このような評価の揺れを最小限にするために日本語教育でも作文のルーブリック評価やマルチプルトレイト評価などが行われている。しかし、このような作文の評価の揺れは、文章構造分析から見ると、正用と誤用に揺れがあること、つまり、どのような判断基準から正用と認定するのか、誤用と認定するのかが問題になる。

作文の誤用の重みは従来の作文研究でも指摘されており、正用か誤用かの認定は実際には判断が難しい場合があることを指摘した研究もある。趙（1991）は、作文の誤用について韓国人の日本語教師への助言として誤りの重みを判定する際の評価基準について、「文法的な正確さ」「母語の影響」より「意味が正しく通じるか」により重点を置くよう

に提言している（趙 1991:29）。つまり、これは、逆に言えば、意味が通じれば、文法的な正確さに関する誤用や母語の影響が多少あっても誤用の重みは低くなることを意味している。

また、宇佐美他（2009）は、誤用の重みについて語彙の誤りに関して意味予測が可能で修正も容易な場合があることを示したが、一方で接続詞の選択による誤用のように「文の構成要素（語、フレーズ等）同士の論理的な関連性が適切に示されていないために、その解釈の可能性に複数のものが出てきてしまい、どの解釈が適切かを判定する決めてがないもの」が意味解釈上重大な障害となると指摘している（宇佐美他 2009:57）。つまり、これは、意味予測ができる誤用とできない誤用とで誤用の重みが異なることを示唆していると言える。

以上の先行研究では作文の誤用の重みという観点から、作文に見られる誤用と正用が明確な認定基準に従って何らかの分類ができるものではなく、誤用か正用かの認定には揺れがあることを示唆している。そこで、上級学習者の作文の文章構造分析を通して、文章レベルにおける誤用の認定を行い、学習者の作文に内在する誤用の要因を探る。

３．日本語学習者の作文の文章レベルの誤用

３．１　文章レベルの誤用

日本語学習者の作文の誤用と正用の間にはいくつかの段階がある。さらに、一見正用のような表現が学習者独自の解釈による使用の結果と見られる表現がある。例えば、上級学習者の作文において「考える」と「考えている」の相違など母語話者にも誤用か正用かの認定が困難な表現がある。これらを正用と認定しながらも、文章レベルでは違和感のある表現として誤用と認定することも可能である。

このように、学習者の作文の誤用を認定する際、（１）言語単位に区切ってその単位内で正用が予測できる場合、（２）正用か誤用かの判断をするにあたって書き手の意図を文脈から把握する必要のある場合、があると言える。（１）は当該の表現のみで処理できる語、句、節、文、連文レベルの誤用である。一方、（２）は文章レベルの処理が必要な段落、文章レベルの誤用である。正用のように見える誤用というのは、（２）の文章レベルの誤用である。

作文の評価において、教師間でも評価基準が異なる場合の一因は、文章構造分析から見ると言語単位の大きさと関係があると考えられる。木戸（2018）では学習者の作文の教師添削において文章構造分析が応用できることを示した。

本稿では、文章レベルの誤用を発見するために、叙述表現、接続表現、反復表現など文章構造の手がかりとなる表現に着目する。さらに、これらの表現を通して文章構造全体における関係性である「連鎖」、「連接」、「配列」にも着目する。このような文章構造

分析によって文章レベルの誤用の要因を明らかにする。

以上の考察を踏まえ、文章構造分析から見た誤用の認定を以下の手順で行う。本稿では、学習者の作文例の中から、（2）の文章レベルから誤用の要因を考察する必要性のある例を中心に取り上げる。

（1）語、節、文レベル内で修正する誤用

- 文章構造に影響なく正用に修正できるもの
- 当該の表現のみ－語、句、節、文、連文レベルの誤用
- 単位に区切ってその単位内で修正

（2）文章レベルまで言語単位の大きさを広げて修正する誤用

- 文章構造の関係性に関わって正用に修正できるもの
- 段落、文章レベルの誤用
- 書き手の意図を考えて修正

学習者の作文にしばしば見られる「思う」の多用のように、動詞の実質的な意味による使い分けがなされていない場合は語レベル、さらにはその語を含む文レベルの問題で、誤用または非用だと言える。一方、「考える」と「考えている」の使い分けのように、動詞の動作主が前後の文脈の意味で決まる誤用は文章レベルの誤用だと言える。

3．2　文章構造分析の方法と使用データ

本研究では、文章論の文章構造分析において、形態面の特徴を踏まえて文章構造の手がかりとなる表現を取り上げ、そのような表現を文章構造の手がかりとなる顕在的な要素と認定する。さらに、顕在的な要素の文章における頻度や分布を見ることにより、文章構造における関係性である「連鎖」「連接」「配列」の様相を明らかにする。文章論の文章構造分析に基づいて文章構造の関係性とそれを担う要素について、木戸（2015）では市川（1978)、永野（1986)、寺村・佐久間・杉戸・半沢編（1990）の文章構造および文章構造の手がかりとなる言語形式を踏まえ、表１のようにまとめた。

表１　文章構造の関係性とそれを担う要素

潜在的な関係性	定義	顕在的な要素	定義
連鎖	文脈展開機能に関係する同種の言語形式の文章全体における出現の連続・不連続の様相	提題表現	文章や談話の話題を示すもの
		叙述表現	提題表現と呼応して文を構成するもの
		反復表現	繰り返し出てくる同一語句
		省略表現	文中の要素のいずれかが欠落しているもの
連接	文（または複数の文からなる段落）相互の接続関係	接続表現	接続詞や接続助詞および、それに相当する機能を持つ語句（副詞・名詞・連語等）や文
		指示表現	文章・段落や場面の中の他の部分を指し示すもの
		時間表現	文章や談話の時間を示すもの
		メタ言語表現	文章の展開を示すもの
配列	前後関係から見た特定の言語形式出現の相対的な位置	文相互の順序	文相互の相対的な前後関係
		文章全体での文の出現位置	文章の冒頭部・中間部・終了部への出現

木戸（2015）より引用、用語・定義は市川（1978）、永野（1986）、寺村・佐久間・杉戸・半沢編（1990）に基づく

本稿では、文章構造の手がかりとなる言語形式について文章構造上に表われる顕在的な要素とし、特に、次節では「叙述表現」、「反復表現」、「接続表現」を取り上げる。「叙述表現」は、話題を示す助詞「は」等を伴って表れる提題表現に呼応した表現であり、文の述部など文末に表われる書き手の判断を示す言語形式も含まれる。「反復表現」は文章内で複数回出現する意味的に同一と認定される表現を示す。「接続表現」は、文相互や段落相互の連接関係を示す表現である。なお、文章論では「接続詞」や「接続語」という用語ではなく「接続表現」のように「表現」という用語を用いる。これは形態素や語以外にも文章構造の手がかりとなる語句一般を指すためである。例えば、「なぜなら」と「その理由は」、「理由として」は同種の「接続表現」と認定する。

一方、顕在的な要素に対し、文章構造上に明示的に表われなくても文章展開の関係性を「連鎖」、「連接」、「配列」として示す。「連鎖」は文章全体の中で同種の意味を担う表現の出現状況によって示される関係性である。例として、反復表現の繰り返しなどが挙げられる。「連接」は文相互および複数の文同士の関係性を示すものである。接続表現によって示されることが多い。「配列」は文の質的内容がどのような順番で出現するかによって示される関係性である。例えば、事実と見解の文の出現順などが挙げられる。

本稿で例として取り上げる作文データは、2006 年度から 2010 年度の筆者の上級レベルの作文授業において研究協力承諾を得た 211 名の作文である。「補講日本語書く」研究

生・大学院生対象の作文授業、および「日本語作文」学部留学生対象の作文授業について主にレポート、要約練習、作文練習が含まれる。これらの授業は10週または15週週1コマ75分授業で、大学での勉学に必要なアカデミック・ライティングを目的とするものである。

3．3　文章レベルの誤用例

（1）叙述表現に関わる誤用

ここでは叙述表現の例を検討する。例の最後の（　）は文章の種類を示す。

まず、動詞「考える」など思考動詞を含む叙述表現の誤用例を取り上げる。

例1　そこで、勝てばいいという考えが少々減ればと考えている。（レポート）

例2　それを考えると、学校の教育は見直すべきであり、学生に対して十何年を用い、真正な求められる人材を導かせる取り組みが必要と考えている。（レポート）

以上の例はそれぞれ1文だけなら正用と認定することもできる。しかし、レポートの中で前後の文脈を読むと、「考えている」のは筆者である私であるはずなのに、「考える」という動詞のテイル形を用いることによって、動作主が他者であるとも解釈できる。読み手にとって「考える」の動作主が一人称なのか三人称なのかは重要な相違点である。このように文章レベルになると、意味があいまいになることから、「考えている」は誤用と認定され、「考える」とル形に修正したほうが動作主が明確になる。

以上の例について「考える」と「考えている」の文法的な機能のみ問題とするならば、これは文レベルで処理できる。形態面では、語レベルの動詞「考える」の誤用である。しかし、動詞の動作主がだれかが特定されなければル形かテイル形のどちらが正用かが認定できない。しかし、レポートの中の1文として読めば、この動詞の動作主は筆者である私、つまり一人称であるはずなのにテイル形を用いることで三人称の可能性も出てくるため、意味のあいまいさが生じる。この段階では、テイル形は文章レベルの誤用と認定される。

「考える」と「考えている」という類似表現の選択は、実は「思う」と「考える」と「言える」に関連する叙述表現の使い分けの問題を含んでいる。論文やレポートなど学術的な文章を書く際、事実と意見の区別、自分の意見と引用元にある他者の意見の区別を明確にすることが求められる。叙述表現の使い分けを正確に行うことによって、以上のような区別が可能になる。図1にこれら3種の動詞と派生した動詞による叙述表現の違いをまとめたものを示す。

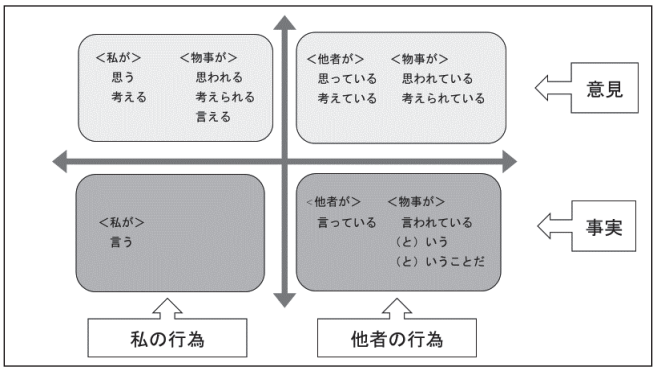

図１　「考える」と「思う」と「言える」の違い

文章論の文章構造分析では、以上のような文章レベルの正用と誤用の認定は、文章構造の関係性のうち「連鎖」に相当する。先に説明したように「連鎖」とは文脈展開機能に関係する同種の言語形式の文章全体における出現の連続･不連続の様相である。この「考えている」の例は、文章中に「考える」「考えている」が複数出現するのではないが、前後の文の叙述表現から他者の意見の引用ではないことがわかるため、「考えている」が正用ではなく誤用と認定される。

次に、「のだ」という文末形式を含む叙述表現の誤用例を検討する。

例３　総務省が 31 日に発表した住民基本台帳に基づく全国の人口によると、総人口は男性 6208 万 435 人、女性 6497 万 7425 人で前年より 1 万 8323 人少ない 1 億 2705 万 7860 人になったのである。（要約文・第 1 文）

例４　現在、日本の住宅ストックは充足しているが、質的にはまだ改善の余地が大きいのである。（レポート・第 1 文）

例３と例４はともに第１文に「のだ」文が用いられた例である。どちらの例も１文内では正用と認定できる。しかし、文章の冒頭に出現する文としては不適切であり、文章レベルでは誤用と認定される。上級学習者に授業で「のだ」文の意味を聞くと、文章の冒頭の文を強調したいから「のだ」文を使用したと答える学習者が見られる。

文の配列から見ると、「のだ」文が文章の冒頭に来るのは何らかの表現効果を狙った場合で、例えば文学など主観性の強い文章が考えられる。また、論文・レポートでは、叙述表現の「連鎖」の関係からは、前に述べたことをまとめる場合に「つまり、～のだ。」

「したがって、～のだ。」のように「つまり」「したがって」といった接続表現と共起する傾向がある。例３は要約文、例４はレポートであり、表現効果をあえて狙う必要のない、むしろ論理性を重視した文章である。つまり、文章の冒頭という文の「配列」において叙述表現に「のだ」を使用することによって引き起こされた誤用と考えられる。以下、図２に「のだ」文の意味用法とされる「説明」「理由」「強調」「前置き」の関係を示す。「のだ」文全体は「関連性」を表す一方、日本語教育で一部の意味用法のみ学習されると、過剰使用あるいは非用が起こると推察される。

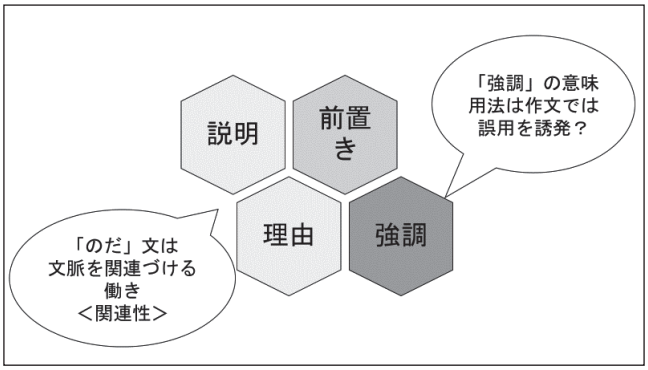

図２　「のだ」文の意味用法と問題点

「のだ」文は上級学習者の作文でも使用が難しい表現で、誤用または使用の回避が起こりやすい。中国語母語の学習者のロールプレイ会話調査による「のだ」文使用傾向を調べた君村(2018)によると、「のだ」文は基本的には文脈を関連づける機能を有していると考えられるが、日中とも教科書には「説明」「理由」という意味で載せてあるものの、中国の教科書では「強調」の意味も載せてある一方、日本語母語話者が使用する「前置き」の説明はほとんどないという。この調査は、会話調査で作文調査ではないものの、中国語母語の学習者の使用する教科書の「のだ」文の意味用法に偏りがあることを指摘している。

「のだ」文の文脈を関連づける機能については、白川（監修）・庵・高梨・中西・山田（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』にも指摘があり、学習者にとって重要な文法項目である。しかし、このような研究成果が教育実践や教材開発にあまり反映されていないように見られる。

（２）接続表現に関わる誤用

ここでは逆接の接続表現に関する誤用例を検討する。

例５　本レポートは現代日本の年長者及び若者が敬語に関する意識のギャップを指し示した上で、その認識のずれから生ずる使い分けの混乱という問題点を指摘した。その問題につれて、敬語がどのように変わってきたと考察すると、社会構造が民主化に従って敬語が簡潔にされてきた状況及び、敬語能力低下のため敬語が分かりやすいものにされてきたことが分かる。ところが、近年敬語の在り方が豊かな表現でしていくべきだと考えている人が増えているということが調査結果から伺える。（レポート）

以上の例は、「ところが」という意外性を含む逆接の接続表現がレポートのような論理性を重視する文章の結果の記述に用いられていることに違和感がある。論理性を重視するなら「しかし」のほうが適切である。図３に「ところが」と「でも」と「しかし」の違いについて、丁寧体と普通体という文体、話し言葉と書き言葉という語彙の種類、論理的結合関係か否かという接続の種類の違いを示す。

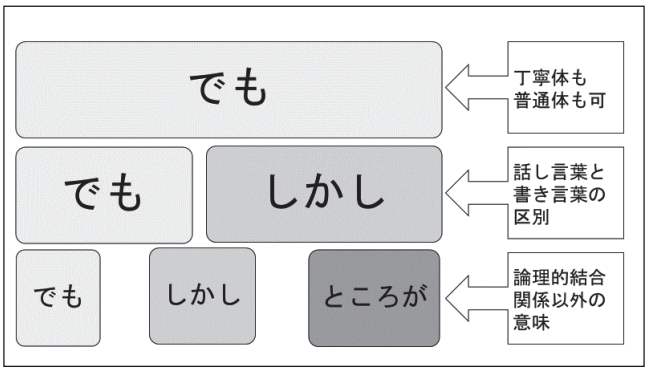

図３　逆接型の接続表現「でも」、「しかし」、「ところが」の違い

以上の例についても先の「考えている」と「考える」と同じく、「ところが」と「しかし」の文法的な機能のみ問題とするならば文レベルで処理できる。形態面では語レベルの接続詞「ところが」の誤用である。しかし、レポートの文体という文章の種類が特定されなければ、「ところが」と「しかし」のどちらが正用かが認定できない。したがって、これも語レベルでは解決できない誤用で、文レベルの誤用と認定される。さらに、文レベル、つまり１文内のみではどちらも正用の文と認定される。しかし、レポートの中の１文として読めば、論理性を重視する文章に主観性の強い「ところが」を用いると文体上の不整合が生じる。したがって、文章レベルの段階では「ところが」は誤用と認定される。

つまり、この例も、語レベル、文レベル、文章レベル、とそれぞれ言語単位の大きさが拡大するごとに、正用と誤用の間で揺れが生じることになる。

文章論の文章構造分析では、以上のような文章レベルの正用と誤用の認定は、文章構造の関係性のうち「連接」に相当する。先に説明したように「連接」とは文、または複数の文からなる段落相互の接続関係である。この「ところが」の例は、レポートという文章の性質上、論理性を重視し、客観的な表現を求められるところに使用したため、逆接という「連接」関係を有するにもかかわらず、誤用と認定される。

「連接」を担う接続表現を作文で用いる場合、上級学習者であっても接続表現の選択は困難な学習項目の１つである。順接の接続表現「だから」「そのため」「したがって」、序列の接続表現「まず」「つぎに」「それから」「また」「さらに」「最後に」、「第一に」「第二に」、「一つ目に」「二つ目に」など、「連接」としては適した表現を選んでいても、その下位分類の意味の区別が学習されていないために誤用を生じていると考えられる。

（３）反復表現に関わる誤用

ここでは反復表現に関する誤用例を取り上げる。

例６　１３日、大阪や和歌山など２府３県の不二家の店舗からペコちゃん人形計１０体を盗んだ被告の判決公判が、和歌山地裁であり、懲役５年に処罰した。判決によると、被告は平成２０年５月～２１年２月、外の被告５人と共謀し、ネットオークションで高値で売買されているペコちゃん人形１０体を盗んだ。（要約文、被告名は削除）

例７　和歌山県警などによると、ペコちゃん人形はネットオークションなどで高値で売買されており、1体15万～20万円の値がつくこともあるという。（記事原文、産経新聞2010年5月13日より引用）

例６は要約文で、「ネットオークションで高値で売買されているペコちゃん人形」という連体修飾節の修飾部に、元の記事原文の内容を入れたため、誤用が生じている。原文の配列では、人形を盗んだ被告の裁判があったという内容の後で例７の文が来ている。その後で、一般にこのような人形はネットオークションなどで高値で売買されることもあるとしていて、被告が盗んだ人形１０体とは異なるものを指している。一方、例６の要約文ではペコちゃん人形という名詞の反復表現から記事で繰り返される複数の同一名詞が同じ指示内容を指すと誤解している。

４．おわりに

以上、文章論の文章構造分析の方法によって日本語学習者の作文を分析した結果を踏まえ、作文の誤用の要因に関する考察を試みた。日本語学習者の作文において、正用の

ように見える誤用の中に文章レベルの誤用が含まれている可能性がある。言語形式の手がかりとして作文に顕在する文章展開の要素を認定し、作文に内在する「配列」「接続」「連鎖」の関係を明らかにすることによって、文章レベルの誤用の要因を解明する一助となることを示した。

今後の課題として、作文分析を積み重ねて誤用と正用の間にある表現の諸相を明らかにし、文章レベルの違和感のある作文が生じる要因を様々な種類の作文を対象にして特定することである。学習効果をより高めるためには、コーパスを用いて誤用自体を網羅的に分類するだけでは不十分である。それぞれの誤用がどのような作文に出現しやすいか、あるいは出現しにくいかを見極め、どのような誤用が作文学習を妨げているのかを明らかにすることが重要である。

注

本稿は、2018 年 8 月 4 日に行われた日本語教育国際大会 ICJLE2018 ヴェネツィアにおけるポスター発表をもとに修正・加筆したものである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP16K02795 の助成を受けている。データ提供および作成にご協力くださった方々に感謝いたします。

参考文献

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版

宇佐美洋・森篤嗣・広瀬和佳子・吉田さち（2009）「書き手の語彙選択が読み手の理解に与える影響－文脈の中での意味推測を妨げる要因とは－」『日本語教育』140 号：48-58

加藤あさぎ・小浦方理恵・石上綾子・木戸光子・田中孝始・長戸三成子（2016）「中上級日本語学習者のレベルチェック作文における典型的問題点」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター 日本語教育論集』31 号：27-145

木戸光子（2015）「作文教育における文章論と日本語教育の接点－日本語学習者が書いた新聞記事要約文の文章構造分析－」（第 11 章）阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版：201-222

木戸光子（2018）「『オンライン』」の文章構造分析に基づく作文添削の意義」『日本語教育方法研究会誌』24 巻 2 号：36-37

君村千尋（2018）『日本語学習者の「のだ」文の使用実態と構文動機－中国語母語話者と日本語母語話者の比較から－』修士論文、筑波大学大学院博士前期課程人文社会

科学研究科
白川博之監修、庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
趙南星（1991）「韓国人の日本語学習者の誤りの評価－日本語話者と韓国語話者による誤りの重み付け－」『日本語と日本文学』15 号、筑波大学国語国文学会：19-40
寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編（1990）『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
永野賢（1986）『文章論総説』朝倉書店
『産経新聞』「ペコちゃん盗に懲役 5 年『身勝手な動機』」電子版、2010 年 5 月 13 日閲覧